

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 6 月 30 日現在

機関番号：28002
 研究種目：基盤研究(C) (一般)
 研究期間：2013～2015
 課題番号：25463507
 研究課題名(和文) 汎用性のあるドメスティック・バイオレンス被害女性早期発見尺度の開発

 研究課題名(英文) Development of an early detection scale for female intimate partner violence victims

 研究代表者
 新城 正紀 (SHINJO, MASAKI)

 沖縄県立看護大学・その他の研究科・教授

 研究者番号：50244314

 交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,900,000円

研究成果の概要(和文)：本研究の目的は、ドメスティック・バイオレンス(以下、DVと略す)の現状把握および潜在しているDV被害女性を早期に発見し、迅速で効果的な対応するための「汎用性のあるDV被害女性早期発見尺度」の開発であった。O県内在住の18歳から59歳までの女性を対象にDV関連の質問紙調査を実施した。質問紙を5,000部配布し、1,937部が回収(1,915有効回答)された。
 回収されたデータをもとに「IPV被害者発見尺度 Detection Scale for Intimate Partner Violence (DS-IPV)」を開発した。この尺度は、4因子から構成されている。

研究成果の概要(英文)：This study aimed to develop an early detection scale for use in medical facilities and the community and appropriate intervention in potential female intimate partner violence (IPV) victims.
 This cross-sectional study used an anonymous self-administered questionnaire given to 5000 women age 18-59 years residing in one prefecture of Japan. Among 1915 returned surveys, data were analyzed from 1277 woman with a partner. In exploratory factor analysis, 22 items and 4 factors were extracted. Confirmatory factor analysis showed that the model had a tolerable goodness of fit. This detection scale may be a useful tool for identifying potential female IPV victims.

研究分野：公衆衛生学・疫学

キーワード：IPV DV パートナーからの暴力 DS-IPV 発見尺度 女性の健康 汎用性 ドメスティック・バイオレンス

1. 研究開始当初の背景

(1) IPV (Intimate Partner Violence、親密な関係者からの暴力)の問題は、複雑・多岐にわたる課題があり、その課題解決のためにはその要因を探り適切な対応、対策および取組が重要である。科学的根拠に基づいたIPV被害者発見、被害程度の把握は、IPVの問題解決のために最も重要である。

IPVの健康被害は、外傷、うつ病、性感染症、流産や低出生体重児の出生の産婦人科異常、慢性痛、消化器症状、喘息、高血圧や心疾患、ストレス症状など多岐にわたっている。また、世界的に共通して配偶者から身体的または性的暴力を受けた女性は、暴力を受けていない女性より自殺念慮や自殺企図の経験が多い(Mary et al. Lancet 2008)から自殺に繋がりがやすい特徴もある。IPV被害女性の早期発見・治療および予防・啓発について、保健医療従事者は、専門家、実践家としての立場から科学的根拠に基づいた関わりが重要である。しかし、医療機関、医療従事者のIPVに対する取り組みは、遅れており、被害者、加害者への適切な対応が求められている。

(2) 医療機関、地域でIPVの早期発見や効果的な予防・啓発活動などの対応を行うためには、まず、IPVを漏れなく早期に発見し、早めに対応することが重要であり、そのための道具として「IPV被害者発見尺度」が必要であることから、本申請に至った。

2. 研究の目的

本研究は、潜在しているIPV被害女性を早期に発見し、迅速で効果的に対応するための「IPV被害者発見尺度」を開発することを目的とした。

3. 研究の方法

(1) IPV被害者になることが多いといわれている女性を対象に質問紙調査を行い、そのデータについて因子分析により「IPV被害者発見尺度」を開発した。

尺度の開発のために〇県に在住する18歳から59歳の女性5000人を横断的研究デザインで無記名自記式質問紙調査を実施し、IPV被害女性に関連すると考えられる質問項目のうち、比較的早期の段階に受ける被害と推察される項目(26項目:4件法)について探索的因子分析および確認的因子分析を行った。質問紙調査の各質問項目の得点は、ほとんどない:1点、ときどきある:2点、しばしばある:3点、ほとんどいつもある:4点とした。

(2) 2015年2月から3月に〇県内保健所の配偶者暴力相談支援センターにおいて、本研究により開発したDS-IPVを用いた調査を実施した。

相談窓口の利用者を対象に被害経験およびDS-IPVを用いた調査(質問紙調査)を行い、相談窓口の担当者を対象にDS-IPVの利用に

関する調査(質問紙調査および聞き取り調査)を行った。

(3) 親密なパートナーのいる女性のIPVについて、感性分析を用いた検討を行った。

対象:〇県在住の18歳から59歳の女性5000名に対し、自記式調査を行った。調査内容:年齢、パートナーの有無、自由記述(意見や感想)であった。IBM SPSS Text Analytics for Surveysを用いたテキストマイニング手法による感性分析を行った。

(4) 親密なパートナーとの関係性と女性の身体的・精神的・社会的健康への影響について検討した。

対象:〇県在住の18歳から59歳の女性5000名に対し、自記式調査を行った。調査内容:年齢、パートナーの有無、主観的健康感、パートナーとの関係性(支配的、暴力的態度の有無)、現在の身体的・精神的・社会的健康状態であった。

4. 研究成果

(1) IPV被害者発見尺度 Detection Scale for Intimate Partner Violence (DS-IPV)を開発した。

回収された調査票は、1938件(回収率:38.7%)で、有効回答は1915件であった。パートナーがいると回答した者は1277名(67.6%)であり、これを解析対象とし、探索的因子分析で22項目4因子が抽出された。抽出された因子は「日常的に抱く感情」、「不安喚起的要因」、「行動制御・抑制」、「威圧・脅し」で、確認的因子分析の結果、モデルは容認できる適合度を有していた。Cronbach' α 係数は、全体で0.91であり、全体の累積寄与率は57.03%であった。また、各因子間の相関は、0.20~0.46($p<0.01$)であり、「日常的に抱く感情」と「威圧・脅し」との相関(0.46)が最も高値を示した。

(2) 配偶者暴力相談支援センターにおいてDS-IPVを用いた調査を実施したところ、3件の回答が得られた。

配偶者暴力相談支援センターの利用者は、IPV被害者であり、DS-IPV平均得点の分布は、2.3、2.5および2.9点であり、3件とも2点(ときどきある)を超えていた。また、「不安喚起的要因」、「行動制御・抑制」、「威圧・脅し」の項目では「しばしばある」、「ほとんどいつもある」との回答が多く、「日常的に抱く感情」の項目では「ほとんどない」との回答が多かった。DS-IPVを用いて相談に応じた担当者のDS-IPVの評価について、以下に述べる。「相手のIPVのタイプがわかる」、「暴力の内容等」、「被害の程度がわかる」、「口で言いにくいことも伝えられる」ということで、被害女性への対応に役立った。「時間の短縮になった」、「相談者に聞く内容をまとめられる」、「口頭でも質問するため」ということで被害女性支援

業務の負担軽減になった。「程度がわかる」、「尺度をもとに話を進めたので」ということで被害女性への支援に役立った。「この結果をもとに報告したので」関係機関との連携に役立ったとの回答が得られた。また、尺度についての自由記述では、「項目も少なく非常に的を射ている」、「簡潔でわかりやすい」などの記述があった。

(3) DS-IPV は、被害者発見だけでなく、被害者への適切な支援にも活用できる可能性が示唆されたが、調査対象数を増やして DS-IPV の有効性および有用性の検討および確認が必要である。

(4) 親密なパートナーのいる女性の IPV について、感性分析を用いた検討を行った。

回収された調査票は、1938 件(回収率:38.7%)で、有効回答は 1915 件であった。パートナーがいると回答した者は 1277 名 (67.6%) であり、これらの者を分析対象とした。対象者の年齢は、18-19 歳 (4.2%)、20-29 歳 (25.5%)、30-39 歳 (29.9%)、40-49 歳 (20.6%)、50-59 歳 (19.8%) であった。感性分析により割り当てられた感性タイプおよび出現頻度は、〈悪い-悪い〉(34)、〈悪い-恐怖〉(10)、〈悪い-悲しみ全般〉(8)、〈悪い-不安〉(6)、〈悪い-不満〉(6) などであった。「彼を怒らせると家の壁に何か所も穴が開くほど叩きつけ、子どもの前で引きずられ、一度は病院受診しました。誰かに相談もできません」、「数年前まで同居していた人は突然きれる、私を否定する、怒鳴る、物を投げるふりをするなど、一緒にいて怖かったです」などの記述があった。

IPV 被害にあった女性は、恐怖、悲しみ、不安や不満などの感情を抱くことが明らかとなった。

(5) 親密なパートナーとの関係性と女性の身体的・精神的・社会的健康への影響について検討した。

回収は 1938 件 (回収率:38.7%) で、有効回答は 1915 件であった。パートナーがいると回答した者は 1277 名 (67.6%) であり、これらの者を解析対象とした。

主観的健康感は、非常に健康である (24.0%)、まあ健康だ (68.8%)、あまり健康でない (6.7%)、健康でない (0.5%) であった。「とても恐ろしい気持ちになる」や「自殺について考えたことがある」の頻度が高い者は、パートナーとの関係に多くの問題が発生している傾向がみられた。一方、これら 2 項目に対する主観的健康感および年齢との強い関連はなかった。「とても恐ろしい気持ちになる」頻度が高い者は、「パートナーに対して自分は力がない、非力であると思うことがある」、「パートナーのきげんや顔をうかがってばかりである」、「パートナーのことが怖く、重いと感じることがある」、「パートナーはあなたの具合が悪い時でさえ、冷たく、つらくあたる」の頻度が高

く、関連が見られた。また、「自殺について考えたことがある」頻度の高い者は、「パートナーに対して自分は力がない、非力であると思うことがある」、「パートナーのことが怖く、重いと感じることがある」、「パートナーはあなたの社会活動 (宗教、信仰、地域活動など) を否定し、嫌がる」、「パートナーはあなたの具合が悪い時でさえ、冷たく、つらくあたる」頻度が高く、関連が見られた。

親密なパートナーのいる女性の身体的、精神的、社会的健康状態は、パートナーとの関係性から影響を受けることが示唆された。特に、「とても恐ろしい気持ちになる」と「自殺について考えたことがある」頻度が高い女性において、その傾向は顕著であった。これら 2 項目は、心身への治療を要する前の早期介入の手がかりになることが示唆された。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 0 件)

[学会発表] (計 3 件)

- ① 新城 正紀、井上 松代、赤嶺 伊都子、親密なパートナーのいる女性のドメスティック・バイオレンスー感性分析を用いた検討一、査読有、第 1 回日本フォレンジック看護学会、2014、東京
- ② 新城 正紀、井上 松代、赤嶺 伊都子、親密なパートナーとの関係性と女性の身体的・精神的・社会的健康への影響、査読有、第 34 回日本看護科学学会学術集会、2014、名古屋
- ③ Masaki Shinjo, Matsuyo Inoue, Itsuko Akamine, Development of an early detection scale for female IPV victims, 査読有, National Conference on Health and Domestic Violence, 2015, Washington, DC

[図書] (計 0 件)

[産業財産権]

○出願状況 (計 0 件)

○取得状況 (計 0 件)

[その他]

ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

新城 正紀 (SHINJO Masaki)
沖縄県立看護大学・保健看護学研究科・教授
研究者番号： 5 0 2 4 4 3 1 4

(2) 研究分担者

井上 松代 (INOUE Matsuyo)
沖縄県立看護大学・保健看護学研究科・講師
研究者番号： 3 0 3 2 6 5 0 8

(3) 研究分担者

赤嶺 伊都子 (AKAMINE Itsuko)
沖縄県立看護大学・保健看護学研究科・講師
研究者番号： 6 0 3 1 6 2 2 1